



死に対して宗教は何ができるか 「スピリチュアルケア」をこえて

田代 志門

東北大学大学院文学研究科
タナトロジ - 研究会 (2005.5.12)



1. ホスピス・緩和ケアの歴史と現状

■ WHO緩和ケアの定義(1994)

緩和ケアとは、治癒を目指した治療が有効でなくなった患者に対する積極的で全人的なケアであり、痛みやその他の症状のコントロールに加えて、精神的、社会的、霊的 (spiritual) 問題の解決が重要な課題となる。緩和ケアの目標は、患者と家族にとって可能な限り最高のQOLを実現することである。



1. ホスピス・緩和ケアの歴史と現状

- **ホスピスケアの3つの理念** (Field & Johnson 1993)
 - (1) **全人的ケア (total care) の重視**
身体的・心理的・社会的・霊的(スピリチュアル)因子が複合した全人的痛み (total pain) の緩和
 - (2) **非階層的で多領域からなるチーム**
医師・看護師・SW等の対等な構成員からなるチーム
 - (3) **患者と家族をともに含むケアの単位**
患者だけではなく、遺族も含めた家族への支援体制



1. ホスピス・緩和ケアの歴史と現状

■ 近代ホスピスの歴史と発展

- ・1967年、シシリー・ソンドースがイギリスで聖クリストファー・ホスピスを開設
- ・福音派のクリスチャン、看護師からSWを経て医師へ
- ・非営利民間組織として「医療的・宗教的施設」を目指す
- ・従来のキリスト教的ホスピスとの相違
 - (1) 科学(医学)の本格的導入
 - (2) 研究教育による情報発信



1. ホスピス・緩和ケアの歴史と現状

■ 日本のホスピス・緩和ケアの歴史と特質

- ・1981年に日本で最初の施設ホスピス、聖隷ホスピスが静岡県に開設
- ・1990年に「緩和ケア病棟入院費」が制定
- ・現在120以上のホスピス病棟(PCU)が存在
- ・「病院」の一部として制度化された日本のホスピス

医師中心・病院中心のモデル形成



2. 「スピリチュアルケア」の発見

■ トータルペイン

その痛みは最初は背中だったわ。でも今は私の全体が何か間違っているような感じがするの (it seems as if all of me is wrong)。お薬や注射をしてくれって泣くようになったけど、でも、私がそんなことするのは許されないんだってということもわかってるの。まるで世界全体が私の敵になって、私のことなんて誰もわかってくれないんだって感じるようになったの。夫も息子たちもとっても良くしてくれるわ。でも、私のために仕事を休まなければならないし、お金も無くなっていくわ。もう一度、これでもいいんだって思えたら、すばらしいんだけど (ソンドース 1989: 235)。



2. 「スピリチュアルケア」の発見

■ スピリチュアルペイン

多くの患者が自責の念あるいは罪の感情を持ち、自分自身の存在に価値がなくなったと感じ、ときには深い苦悶の中に陥っている。このことが、真に「霊的な (spiritual) 痛み」と呼ぶべきものとなり、それに対処するために助けを必要としている。……患者によっては背景に教会との関係があるので、霊的な問題については入院中の患者はチャプレン(病院付き牧師)と、在宅の患者は自分自身で選んだ僧侶あるいは牧師と、早い時期から相談できるようにすることが大切である(ソンドース&バーンズ1990: 59-60)。



3. 日本の「スピリチュアルケア」実践

■ キリスト教と「宗教的ケア」

日本のホスピスが起ち上がった初期は、キリスト教の立場に立つホスピスが多かった。そこで、ほとんどのホスピスでは、スピリチュアルケアをホスピスの課題として受け入れた。しかし、実際になされたのはキリスト教的立場に立つ「宗教的ケア」であって、「スピリチュアルケア」とは異なるものであったとの疑問がある (窪寺 2000: 125)。



3. 日本の「スピリチュアルケア」実践

■ 「スピリチュアルケア」の世俗化(神谷、2000)

- (1) キリスト教中心の宗教的ケア(70年代後半～80年代中旬)
- (2) 仏教や無宗教の立場の参入(80年代中旬～90年代初頭)
- (3) ボランティアや看護師が行う「傾聴と共感」(90年代以降)

「宗教家だけでなく末期患者に関わるどんな人でもできるケア」に変容



3. 日本の「スピリチュアルケア」実践

- 「傾聴の技法」と村田理論(村田、2002 2004)

- ・自律存在・関係存在・時間存在としての人間とその喪失に伴う「痛み」のアセスメント
- ・「傾聴と共感、そして共にいること」による「スピリチュアルケア」

「スピリチュアルペインの構造」と「コミュニケーションスキル」からなるケアプロセス



3. 日本の「スピリチュアルケア」実践

■ 「スピリチュアルケア」の問題点

- ・「心理主義的誤謬」(小林 2004)

スピリチュアル/メンタルの区別が不可能に

- ・背景にある人間理解の問題点

三つの存在構造の導出方法とその関係性の不明確さ

- ・西洋モデルの単純な受容

個人主義的ケア 個人対個人のカウンセリング

歴史性・地域性の欠如(「病院化」したケア)

- ・技術モデルの問題点(「できる」思想のホスピスケア)



4. 「お迎え」の向こう側 - 民俗学と民間信仰研究

在宅ホスピス医の体験した「お迎え」

- ・先生、あそこに、戦艦陸奥に乗っていて呉で爆沈された兄貴が見えるよ。何にも言ってくれないんだ。
- ・夢におじいさんが登場した。「こっちに来い」って言われたんだけど、「子供がまだ大変なんだからまだ行きたくないよ。だから行かないよ」って言って追い返しました。
- ・今せっかく私の父ちゃん、母ちゃんがここに来ていたのに、お前の足音で消えてしまったよ。



4. 「お迎え」の向こう側 - 民俗学と民間信仰研究

岡部はこの初期の経験をもとに、「もうだめだ」とか「もう死ぬ」と言っている患者との日常生活のなかで、いわばコミュニケーション・ツールとして、「お迎えはもう来たの?」「まだです」「じゃあまだ行けないでしょ」という表現を取るのを習慣にしていた。……岡部はこのように、「お迎え」という表現を使って患者との日常生活をすることによって、患者自身が自らの死の準備をする覚悟を決める契機を提供できるのではないか、という心証を強くするようになった（清藤他 2002: 45）。



4. 「お迎え」の向こう側 - 民俗学と民間信仰研究

施設型ホスピスの特殊な「スピリチュアリティ」

病院やホスピスで「お迎え」があまり観察されてこなかったのも、これまで病院やホスピスが、ともに臨死期の間としては、本人や家族や地域の自然発生的な死生観文化の入り込む余地の少ない特殊な環境であったことに、少なくともその一因があったのではないか（同：49）。

「無信仰か仏教・キリスト教信仰のどちらか」
という医療者の思い込み



4. 「お迎え」の向こう側 - 民俗学と民間信仰研究

■ 「お迎え」アンケートの結果にみる死生観

死後の世界の実在は必ずしも自明ではないが、先祖を日ごろから崇拝することや、先祖を敬うために盆や正月に祈ったり墓参りをするなどの宗教的儀礼は大切である。『お迎え』は、自分が体験するかどうかは予想できないが、あってもおかしくはない(同:49)。

祖先祭祀に基づく他界観・靈魂観



4. 「お迎え」の向こう側 - 民俗学と民間信仰研究

■ 柳田國男 『先祖の話』(1947)

・死者との親密な交流

「死後の世界を近く親しく、何かその消息に通じているような気持ち」

第一には死してもこの国の中に、霊は留まって遠くへは行かぬと思ったこと、第二に顕幽二界の交通が繁く、単に春秋の定期の祭だけで無しに、何れか一方のみの心ざしによって、招き招かるることがさまで困難で無いやうに思っていたこと、第三には生人の今わの念願が、死後には必ず達成するものと思っていたことで、是によって子孫の為に色々の計画を立てたのみか、更に再び三たび生まれ代わって、同じ事業を続けられるものの如く、思ったものが多かつたといふのが第四である。



4. 「お迎え」の向こう側 - 民俗学と民間信仰研究

- 日本人の祖霊観 (鳥越 1993)

- ・ 霊肉二元論

- 各人がひとつづつ持っている魂(たま)

- 生霊(イキミタマ)と死霊

- Cf. 両墓制 (「埋め墓」と「参り墓」)

- ・ 死霊から先祖へ

- 近親者の儀礼により死霊であるタマは子孫を守るカミに

- Ex. 三十三回忌の「弔い上げ」

- 仏教的祖霊観(十万億土、永遠の供養)



4. 「お迎え」の向こう側 - 民俗学と民間信仰研究

- ・ 「魂まつり」としての盆と正月

祖霊の定期的な往来のための儀式

Ex. 盆道と盆花、ほとけむかえと盆火、精霊船

- ・ 自分の死霊をまつる人の重要性

「子孫」不在への不安（「家永続の願い」）



4. 「お迎え」の向こう側 - 民俗学と民間信仰研究

■ 山中他界観と仏教的世界観

・「山岳信仰と仏教コスモロジーの融合」としての山中浄土

端的に言って、インド人の考えた浄土は、「西方十万億土」の彼方にある形而上学的な浄土であった。われわれの想像を絶するような、途方もなく遠いところにある抽象的なパラダイスだったといいだろう。ところが、この抽象的な浄土観はひとたびわが国に伝えられるや、たちまち変質せしめられた。なぜなら浄土は西方十万億土の彼方にあるのではなく、われわれの生活圏をとりまいている山の中にこそ存在するという観念が生じたからである(山折1993: 66)。



4. 「お迎え」の向こう側 - 民俗学と民間信仰研究

■ 東北民間信仰の世界と「山中浄土」

私が清水の森に行った時は村の80歳近い老婆と一緒にであったが、彼女は小さな風呂敷包みを背負い、杖をついて坂を上るのであるが、子どもの時から何十篇何百篇のぼるかわからないが、やがて死ねばだまってもお山に登れるんだ、と言って笑った。魂の行って住むべき所を生前から持つことのできるこの老婆など村人は幸福なことだと思う(岩崎 1982: 119)。

Cf. ハヤマとモリノヤマ、霊山(出羽三山や恐山)



4. 「お迎え」の向こう側 - 民俗学と民間信仰研究

- 「古層」としての海上他界観
 - ・ 海の彼方の常世(とこよ)の国
 - 豊穡と生命力に充ちた理想世界、あるいは死者の国
 - 常世からの来訪者としての「まねびと」
 - 日本人の神の原型(折口信夫の「まねびと論」)
 - Ex. 沖縄のニライカナイ信仰
 - ・ 観音浄土と補陀落渡海
 - 常世観念と仏教の往生概念の習合



4. 「お迎え」の向こう側 - 民俗学と民間信仰研究

常世は水平線の彼方にたいする憧憬が死とまじりあったものである。そこには目路(めじ)の果ての潮けむりのような妣(はは)の国のイメージがはるかに立ちのぼっているところである。出雲の粟島からスクナヒコの神が粟茎(あわがら)に弾かれて常世の国にいったと『古事記』にあるように、古代日本では、死は回帰として水平線にかかる放物線の虹のように描かれている。常世をたずね求めることは、日本民俗渡来の海の道を南へとたどり直し、民族の始原の記憶に立ち会おうとする衝動につながっていく(谷川 1989: 20)。



4-2. 中間考察

- 民間信仰の世界からみる日本の「宗教」
 - ・たましいの連続性
 - ・死者との頻繁な交通
 - ・自然環境のもつシンボリックな意味
 - ・集団・組織(イエ・ムラ)による儀礼
- cf. イエ集団の持つ宗教的側面



4-2. 中間考察

- 死生の問題と「宗教」に対する多元的アプローチ
 - (1) 「文化的表象」：日本社会のレベル
 - (2) 「集合的経験」：地域社会のレベル
 - (3) 「個人的体験」：個人の意味づけのレベル

Cf. 「病の語り」の三角形（クラインマン）

「宗教」への視点を、ケアの現場でどう生かせるのか、事例を収集し、3つの視点を重ねあわせて考えていく